



現地新聞報道などから考える小規模特認校制度の導入と展開：
全国2番目・室蘭市（喜門岱小学校）の事例を通して

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-03-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 門脇, 正俊 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00006508

現地新聞報道などから考える小規模特認校制度の導入と展開

～ 全国2番目・室蘭市（喜門岱小学校）の事例を通して～

門 脇 正 俊

北海道教育大学岩見沢校教職特任教員室

A Study on the Introduction and Implementation of “Small Schools with No School District” from Local Newspapers

～ In the case of Muroran City, “Kimontai Primary School”,
the Second Traditional System in Japan ～

KADOWAKI Masatoshi

Department of Education, Iwamizawa Campus, Hokkaido University of Education

概 要

1977年度の札幌市（3小学校）に続いて、その2年後の1979年度に、北海道で、従って日本で2番目に小規模特認校制度を導入した室蘭市（喜門岱小学校）の事例を中心に、現地新聞「室蘭民報」記事等を紹介・考察しながら、小規模特認校制度の導入や展開の過程についての考察を試みた。かなり以前から、喜門岱小学校も道教委も室蘭市での特認校実施が1978年であると公的資料で紹介してきていることに対して、実は当時の現地新聞である室蘭民報（や北海道新聞）が、78年ではなく79年実施を報じていた記事の紹介を出発点に、特認校制度の導入過程などの事実確認の上でも、小規模特認校の特色ある教育実践やその時々々の課題を知る上でも、現地新聞報道に学ぶことは非常に有益であることも指摘した。教育委員会や学校が歴史研究に必要な古い資料の保管や引き継ぎが不十分であったり、多忙な日常的業務負担から倉庫等確認作業等への抵抗感もあり資料提供の依頼がしづらい状況の中で、実証的な学校史研究は困難な状況に置かれている。古い現地新聞の記事調査も労力や忍耐を必要とする作業ではあるが、研究に必要な行政資料や学校資料の提供を依頼する上でも、新聞記事による期日の特定は、協力を受けやすい効果もあると考え、また実際に本研究を通じてそのような実感も経験した。なお、特認校制度第1号の札幌市の場合は先行事例として紹介されることもあり比較的周知されているが、2番目の室蘭市については先行研究の事例も皆無といってよく、ほとんど知られていない現状の中で、本稿が地方都市での先行事例を取り上げた意義はあると考える。また、道内外の特認校実施理由に複式学級回避があげられることも多いが、喜門岱小学校は2016年度に

120周年を迎える古い学校であるにもかかわらず創設以来一貫して複式学級校として存続し続けてきたようで、複式学級回避ではなく、伝統的な小規模複式学級校としての自覚のもとに特色を発揮してきた学校であり、その点では、大都市・札幌の盤溪小学校等が特認校制度導入して間もなく人気校として多くの生徒を集め単式学級校として存続してきたこととは異なった、地方特認校としての特色を有しているともいえようか。

はじめに～教育委員会・学校の公的資料と新聞報道との食い違い～

札幌市が1977年に全国で初めて小規模特認校制度を導入した翌年の1978年に、室蘭市が『無学区制』という名称で、喜門岱小学校を市内全域から転入学できる学校に指定したと筆者は理解し以前の拙稿①～③で紹介もしてきたが、その理解や紹介は不十分で誤解を生むのではないかと最近考えるようになった。実は、北海道教育委員会作成の北海道内小規模特認校一覧資料には室蘭市での特認校実施は1978年と記されており、特認校である喜門岱小学校ホームページの「喜門岱小学校のあゆみ」でも「昭和53年4月、市内唯一の特認校指定」と表記されているが、特認校を全国で2番目に導入した室蘭市喜門岱小学校での実施過程を把握するために、地元新聞「室蘭民報」紙を詳細に調査しているうちに、「喜門岱小学校が特認校としてスタートしたのは、78年ではなく79年である」ことに気づいたのである。即ち、特認校としての決定年度と実施開始年度の混同と区別の必要である。

1977年度に全国で初めて小規模特認校制度を実施したと全国的にも周知されている札幌市の場合、札幌市議会での教育長による新制度実施の発表は前年度の1976年12月であり、実施開始は77年4月である。しかし室蘭市の場合、77年や78年の新聞報道に、喜門岱小学校での校区外児童受け入れに関する記事は見当たらず、78年4月の市内入学式を報道した記事は以下のようになっていて、校区外児童受け入れへの言及は見当たらない。

「…たった1人の入学式 喜門岱小 市内の超ミニ校・喜門岱小学校（砂田允則校長）でも、この日午前10時半からたった1人の入学式が行われた。在校生8人と父母の拍手のなか、新1年生の宮谷美恵ちゃん（市内香川町）が入場、…全校児童9人の学校生活が始まった」（室蘭民報1978.4.7 香川町は校区内）

そして、その翌年79年4月の入学式報道記事は次のようになっていて、79年度より校区外通学がスタートしたことが理解できる。

「…一方、この日たった1人の入学生を迎えたのが、市内一のミニ校・喜門岱小学校（砂田允則校長）。当初入学者ゼロの予定だったが、今年から同校に限って“越境入学”が認められ、寺尾茂樹ちゃん（6つ）＝元輪西町1-1-6、書店経営、征裕さん（35）長男＝がこれに応じた。9人のお兄さん、お姉さんと先生らだけの入学式だが、6年生の森田美香さんが『人数は少ないけれどみんな仲良し。花壇造りなども、これから一緒にしましょう』と歓迎の言葉を述べると、茂樹ちゃんもニッコリ。早くも子供同士の心の通い合いを感じさせていた」（室蘭民報1979.4.6夕刊）

また、実施6年目の1984年3月、「ここにも不況の影 減少続く新1年生」の見出しで室蘭市の新入生数減少を伝えた記事の最後でも、次のような喜門岱小への言及がある。

「こうした中で、市内一のミニ小・喜門岱小には3人が入学する。最高の自然環境を生かして、54年度からスタートした“全市区”の『無学区制』を敷いて6年目を迎える同校。3人の新1年生のうち2人が、この制度下で入学する」（室蘭民報1984.3.30）

このような些細な記事を本稿冒頭でくどくど紹介してしまったが、その理由は、事実確認の上での地元新

聞記事の果たす役割の重要性を再認識したからである。これらの新聞記事からは、室蘭市が喜門岱小学校での小規模特認校制度を実施したのは1978年度ではなく79年度である、と理解しなければならないようであるが、室蘭市が新制度の導入を決定したのはいつであろうか。いつ頃から、なぜ、このような食い違いが生じたのであろうか。室蘭市教育委員会や喜門岱小学校からは、そのことを裏づける情報提供を受けることは出来なかったが、地元新聞や市広報誌、市議会記録なども調査しながら、室蘭市における小規模特認校の導入と展開の過程を考察するの必要を感じた次第である。本稿では、室蘭民報と北海道新聞室蘭・西胆振版を中心に、全国最初で全国的にも周知されている札幌市特認校に比べて、今までほとんど知られてこなかった特認校2番手の室蘭市（喜門岱小学校）の事例を考察する。些細なことにもこだわった、ささやかな報告であるが、北海道や全国の小規模特認校制度の推移や課題を考える上でも参考にもなればと期待している。

1. 室蘭市における小規模特認校制度の実施年度、実施の背景や理由、名称など

A. 室蘭市立喜門岱小学校の90周年記念誌、百周年記念誌、110年記念誌における「特認校」関係記述

室蘭市立喜門岱小学校開校90周年記念誌「喜門岱」（1986.10.5）所収の「開校90周年を迎えて」と題した校長挨拶では「本校も児童数が減少し、昭和53年度より、豊かな自然環境を生かして全市1区の通学制をとり、豊かな個性を育成するため“強く”“正しく”“美しく”の学校教育目標を中心に、教職員一丸となって意欲的に取り組んでいます」（p. 3）と記されているように、「全市1区の通学制」実施が1978年度であると認識・表記されていること、特認校という用語は使用されていないことが理解できる。なお、少し残念ではあるが、喜門岱小学校の沿革を紹介した年表部分の78年度や79年度の欄には「校区外通学」開始等の特認校関係記述は見当たらなかった。従ってまた、校区外通学受け入れ開始後既に10年近くが経過しているにも拘わらず、校区外通学児童数やその推移等を紹介した資料も見当たらず、記念誌冒頭挨拶文を除いては校区外通学への言及が見出せない。

しかし、その10年後1996年10月1日発行の喜門岱小学校百周年記念誌「喜門岱」では、「特認校」用語も登場し、沿革史年表にも昭和53年の欄に「特認校となる」と明記され、「特認校」関係記述も少し増加している。百周年記念誌冒頭の校長挨拶「開校百年を迎えて」では、以下のように、同校の特色ある教育の始まりや特認校実施について言及していた。即ち、特認校制度導入5年ほど前から喜門岱小特色づくりの取り組みが始まっていたことになる。

「昭和49年頃からPTA・地域父母の協力で始まり現在も続いている花壇づくりは、本校の伝統となる特色ある教育活動の1つです。翌50年から毎年全道花壇コンクールで優秀な成績をあげ、57年には全国花壇コンクール最優秀賞にも輝き、全国的に本校の名を知らしめています。

また、他地域と同様に本校にも児童数の減少傾向が見えはじめ、昭和53年からは、恵まれた豊かな自然環境を生かして全市1区の通学制をとる特認校となり、豊かな人間性を育成することを目指し、“強く”“正しく”“美しく”を校訓として、教職員一丸となって意欲的に取り組んでいます」（p. 2）

室蘭市教育長の「開校百周年を記念して」と題した祝辞にも、「昭和53年、室蘭市唯一の特認校指定を受けております」と、「特認校」用語を使用し、また昭和53年指定との表記になっている。校区・香川町会長による「学校・地域の百年を祝して」と題した祝辞には「特認校」用語は登場しないが、次のように通学区域全市開放への期待を述べていた。

「喜門岱小学校の通学区が市内全域に開放されている現状から、父母の皆様には、本校を通じて、児童が花と緑に囲まれた豊かな自然環境の中で、情操豊かな人間形成の道を求めることが理解されて、児童の教育への場を本校に求め、児童確保にも役立ってほしいものです」

百周年記念誌冒頭の挨拶・祝辞以外では、一カ所「特認校について」の小項目があり、その内容が特認校制度導入過程に関連するので、全文を以下に紹介する。

「欠学年になっては困るというので、森田さんの息子さんに頼んで、伊達牧場の方から1人来てもらった。これが特認校になるきっかけで、次の昭和53年に特認校として認可された。

——特認校になって最初に子供を入学させた寺尾さんの話——小さな学校で、

自宅前の旧37号線は車の量が多く、子どもの遊び場がほとんどなかった。子供の1人の言葉が遅く、大きな学校より小さな学校で、しかも自然の中でのびのび育つ環境の学校で学ばせたかった。学校に通っている間は良いが、休みの日など友だちとの遊びがないのが心配だったが、それは大丈夫だった。土曜日はバスがないので親が迎えに来た。その時は、職員室で親たちと校長先生がよく話をしていた。それがみんなの結束につながった…昭和58年には地元の児童より離れた所から通ってくる児童が多くなった。喜門岱小学校独自の教育方針が子供たちにとってプラスになると思う。交通の便がよかったらもっといいのに…」(p. 33)

「森田さんの息子に頼んで伊達牧場の方から1人来てもらった」年度も、校区外通学か転居かも不明であり、53年特認校許可という記述も疑問ではある(110周年記念誌の卒業生名簿の「森田」姓は1980.3卒女子と1979.3卒男子が最も新しい)。特認校最初の入学者である寺尾さんについては後で言及したい。

110周年記念誌(2007年3月1日)の校長挨拶「開校百十周年を迎えて」においても、「昭和53年」特認校開始の表記は変わらないが、学校史年表の昭和53年欄には、なぜかわからないが、百周年誌年表には表記されていた「特認校となる」表現が削除されている。記載されなかったり(90周年)、記載されたり(百周年)、削除されたり(110周年)と、「学校史」における特認校の位置づけが異なっているのは、その時々の教職員の意識・自覚の反映であろうか。それはさておき、110周年記念誌での校長挨拶が「特認校」に言及している箇所を、その前後を含めて紹介しておく。

「…その後の産業構造の激変により、基幹産業の酪農は年々衰退、同時に少子高齢化が進みました。そういう中本校は、昭和53年室蘭市内一円を校区とする特認校になりました。十年前の平成8年には開校百周年の祝賀行事が盛大に行われましたが、その後も地元香川町会は益々少子高齢化が進み、現在地域の子供は4年生を最後にいなくなるという現状を迎えております。今、北海道のどの学校も児童数が減少してきておりますが、喜門岱小学校は室蘭市内唯一の特認校として年々児童数が増加し、本年度は児童数31名と開校以来最多の人数になり、校区外からの通学が8割を超えました。しかし、地域があつての学校であり、地元の皆さんには本校の教育活動や施設など色々な面でお世話になる一方、本校のPTAではここを第二の故郷として一家を上げて地元行事に参加させていただくなど、学校と地域の結びつきを一層強めております」(p. 2)

B. 室蘭市での小規模特認校制度は昭和54(1979)年3月実施決定、同年4月実施開始

室蘭市立喜門岱小学校への校区外通学を特例的に認めた制度の導入は、室蘭市教育委員会から情報提供を受けたであろう北海道教育委員会作成資料にも、喜門岱小学校作成の開校90周年誌、百周年誌、110周年誌や学校ホームページ等にも「昭和53年」と記載されてきているが、開始年度認識の食い違いは、既に90周年の1986年頃には生じていたことになる。「はじめに」でも資料紹介して指摘したように、新制度の実施は昭和53年度ではなく、54年度ではないかと推測されるが、地元新聞の次の記事は、そのことを決定的なものとしている。即ち、「室蘭民報」昭和54年3月13日は、「自然の中のミニ小に『どうぞ』 喜門岱小の校区撤廃 来月から実施 市教委が初の試み」の見出しで、次のように報道している。

「室蘭市内のミニ校で児童数の減少が続いている喜門岱小学校(砂田充則校長)の校区が、4月から室蘭としては初めて全市に広げられ、どの地域の児童でも通学できることになった。児童減少対策だけでなく、市内一恵まれた自然条件のなかでのわが子の教育を望む父母の要望にこたえようという市教委の特別措置。健康児で

しかも親が通学途中の安全を十分に図れる—などの条件もあるが、これまで道内では札幌で実施しているだけで、ユニークな方式による成果が注目される。

市内唯一の農村地帯・石川町にある喜門岱小。82年の歴史を持つ同校は、市内一の小規模校。児童数は減り続けており、今の在校生は1-3年と6年生が各1人、4、5年生が各3人を合わせて10人だけ。ことしの卒業生は森田賢治君1人だけだが、新入生はゼロ。このため同校の将来について学校関係者や地域住民の間に危機感が広がり、札幌で51年(?)から実施されている校区のワクを外す措置の実施を望む声が上がった。

要望を受けた市教委で検討したところ、同校が将来的になくなる可能性は少ない—と判断しながらも、余裕ある施設の有効利用や、なにより同校が市内で最も恵まれた自然環境にある点などを考慮して結局、暫定的な特別措置として年度替わりの4月から試験的に実施することに決まった。実施については、同校や地元町会、PTA側の協力を取り付けており、市内小学校長会の賛同も得た。

市教委としては、原則として病弱児、虚弱児を除いた“健康児”を対象に、現在の1クラス45人編成では集団になじめない子や、ちょっとしたゼンソク症状の子らの親で、喜門岱への転・入学希望があれば応じる考え。ただ、市内全域が、校区となるため、通学の“足”や途中の児童の安全が、完全に責任の持てる体制を親の側で確保してもらうことを絶対の条件としている。

要望が実った同校の砂田校長は、“こんなすばらしい環境は市内にはない。この恵まれた自然のなかで、子供さんにマンツーマンの教育を望む人はぜひ”と話している。実際に何人が同校への転入を望むかはフタを開けてみなければわからないが、新しい試みとして教育関係者や父母の注目を集めそうだ」

長文の記事をそのまま引用したが、導入決定時の市実施要綱や市教委議事録などで確認することができなかった(35年以上前のことで、市教委でも資料確認ができないとのこと)ので、この新聞記事が当時の公的資料に代わるものとしての意義を有すると考えたからである。なお、北海道新聞も、同じ13日の朝刊で、「ゼンソク児や学校ぎらい歓迎! すてきな環境が“葉”だヨ 室蘭郊外の喜門岱 市教委 新学期から越境実施」の見出しで同趣旨の内容を報じていた。従って、昭和54年3月12日頃に記者発表が行われ、54年4月から実施されたと推測できる。つまり、53年度末の54年3月に決定され、54年度に実施されたと理解すれば、教育委員会や学校の公的資料では決定年度と実施年度の混同が続いてきたということになるだろうか。なぜそのような食い違いが生じたのかわからないが、室蘭市教委や喜門岱小自体の53年実施認識は誤解の1人歩きということになるだろうか。しかし、室蘭市喜門岱小学校での特認校実施が1年遅れの54年度であっても、北海道での2番目、従ってまた全国でも2番目であることには変わりがない。

C. 特認校制度実施の背景、理由、名称など

1979年4月実施を伝えた同じ3月13日の両紙朝刊報道はほぼ同趣旨の報道ではあるが、室蘭民報にはない北海道新聞の報道内容として、次の記述にも注目しておきたい。

「同市教委には度々“子どもがゼンソク気味で、環境の良い学校に転校させたいが…”といった父母からの問い合わせが来ていたが、今回の決定はそれにこたえるもの。一昨年4月、“自然の中でわが子を育てたい”との親の希望をくんだ札幌市教委が、市街地に住む女の子の盤溪小学校への越境入学を認めて話題になったこともヒントになった。市教委の話では、特認の対象となるのは、同市内の小学生で、例えばゼンソク気味といったアレルギー体質などで、市街地の学校では健康増進を図れない子や、学校ぎらいなど、性格的に集団生活になじめない児童。越境入学特認の条件として『通学の責任は親が負うこと』を挙げている。今のところ越境入学を認めるか否かの“判定基準”は作っておらず、希望する児童と両親の面接で決めるが、喜門岱小の先生は校長を含めて4人の小世帯なので、受け入れられる児童数は10人程度と見ている。」

「ゼンソク気味といったアレルギー体質」とか「学校ぎらいなど性格的に集団になじめない」といった表

現で、いわゆる「問題を抱えた児童」を積極的に受け入れるという方針は、特認校制度第1号の札幌市の場合にはなかったように推測され、第2号の室蘭市の場合との相違を感じる。札幌市についても室蘭市についても、制度導入時の実施要領で確認する機会を持っていないが（両市教委に閲覧のお願いをしたが、両市教委からは現行の実施要領を提供いただいたものの、発足時の実施要領の保存確認ができていない、との回答であった）、導入の趣旨、基本的な考え方、認可基準などはほとんど変更ないのではないかと、この話であった。昭和52年1月の教育長決済で制定され、昭和61年12月、平成18年4月、平成19年9月、平成28年6月の4度の改正を経ている札幌市の現行「小規模校に対する特認入学の取り扱い」は、その冒頭部分で、以下のよう

1. 趣旨及び目的

本市の周辺部に位置し、自然環境に恵まれた小規模校で、心身の健康増進を図り、体力づくりを目指すとともに、自然に触れる中で、豊かな人間性を培いたいという保護者の希望がある場合には、一定の条件を付し、これを認めることとする。

2. 基本的な考え方

この特認入学は、保護者が上記の趣旨目的に従い、真に小規模校の有する特色の中で、児童・生徒に教育を受けさせたいという場合に限定されるものであり、保護者の恣意によって、就学すべき学校の変更を認めるものではない。

従って、保護者が小規模校に、児童生徒の特認入学を希望する場合には、別に定める条件により、通学状況及び生活指導面等について、十分に教育的な配慮をしたうえで、市教委の指定する学校に限り認めるものである。

3. 対象となる学校及び定員（以下、省略）

これに対して、平成2（1990）年2月制定で現行の室蘭市教育委員会「喜門岱小学校入学に関する特認取り扱い要領」は、以下のような書き出しになっている。

「室蘭市立喜門岱小学校を、一定の条件のもとに、通学区域以外から入学（転入学を含む。以下同じ）できる特認校として、下記のとおり取扱うこととする。

記

1. 許可基準

室蘭市に居住する普通学級対象児童で、次のいずれかに該当するもの。

- (1) 身体的理由（ぜんそく・アレルギー体質等）により、空気環境の良い場所で持続的に健康増進を図り、その再発を防ぐため通学を希望する場合。
- (2) 心身的理由による学校不適応児で、環境を変えたり、小規模校の個人指導的要素を取り入れることによって、問題解決になると判断される場合。
- (3) 自然環境に恵まれた小規模校で、少人数指導を望み、自然に触れ、豊かな心とたくましい体を育てたいという保護者の強い希望がある場合。
- (4) その他、教育長が特に認めた場合。

2. 申請手続き（以下、省略）」

室蘭市の許可基準(1)～(3)のうち、どちらかという(3)が札幌市の場合中心的位置を占めているのに対して、(1)や(2)のニュアンスは、札幌の場合は乏しいように感じられる。前掲の北海道新聞報道は、札幌市の先行事例が室蘭市での導入のヒントになったと伝えているが、どのような内容で、どの程度にそうであったのか、もう少し踏み込んで検討しておきたい。

全国で初めて、1977年度から小規模特認校制度を導入した札幌市の場合、かつての拙稿もその責任の一端

を担っているのが、統廃合の危機にあった小規模学校の存続・活性化対策として導入理由を受け止めがちでもあった。例えば筆者は、小規模特認校用語を解説した拙稿③を、下記のように書き出していた。

「小規模校存続のため札幌で開始 児童数が減り、統廃合の危機にあった都市周辺部の小さなへき地的学校の存続や活性化のために、1977年に札幌市が山間部の3小学校（盤渓，駒岡，有明）を『特認校』として、校区外からの通学や1学年20人以内という特例的措置を講じたのが始まりである。…」

しかし、筆者が最近、札幌市における特認校制度導入の経緯を再認識するために、1977年前後の新聞記事を調査していた際に、札幌市での1977年度導入決定を報じた1976年12月の北海道新聞の「脱都会」で強い子に 札幌市教委 来春から指定小学校へ越境入学認める」という見出しの次のような記事に出会った。

「都心の学校より、自然環境に恵まれた空気のうまい、いなかの学校に通わせたい！という父母の願いを入れて、札幌市教委は来年度から小学生の『特認入学』を認めることになった。15日開かれた札幌市議会本会議で川崎教育長が明らかにしたもので、全国でも珍しい小学生版“脱都会”といえそう。来年早々にも内部的取り扱必要領を決めて、4月から希望者を入学させる。…」

最近、京都から市内へ転勤してきた家庭から『体が弱い子供を自然に恵まれた小学校に通わせたい』という申し出があったことから、児童本人のため、さらに児童数激減で廃校の恐れのある学校のためにもなると実施を打ち出した。…」

筆者はこれまで、小規模特認校制度を、小規模校の存続と活性化の視点に重点を置いて捉えていたのであるが、最初に特認校制度を導入した札幌市の場合も、それだけでなく、あるいはそれ以上に、豊かな自然に恵まれた小規模な学校への通学を必要とする市街地在住の子どもの視点があったのである。そのような子どもの視点を、札幌市以上に強く打ち出した視点を、室蘭市の特認校制度の導入は有していたと理解することができようか。前掲の室蘭市の喜門岱小学校の特認取扱い要領における認可基準は、そのことを示している。

道内外の特認校の中には複式回避を導入目的にしていることが少なくないように、複式学級は避けるべきマイナス条件として受け止められがちであるが、喜門岱小学校は120年の長い歴史の中で複式校として存在し続けてきたのであり、複式をむしろ特色として受け止めて特認校制度を実施してきたといえようか。

例えば、2014年になって小規模特認校制度を導入した福岡県久留米市では、複式学級化回避が目的で導入されたが、2年後には複式学級化の心配がなくなった学校と複式学級回避の見込みがない学校になったとの判断理由でわずか2年間の実施だけで2016年度は実施を休止している④。

既に紹介・言及したように、室蘭市教委で平成2年2月1日制定の「喜門岱小学校入学に関する特認取扱い要領」を提供いただいたが、それ以前の要領等の所在の確認はできないとのことであった。この要領が制定された前後の室蘭民報等の新聞記事を調査したが、残念ながら、この新要領制定に関連した記事を見出すことはできなかった。この平成2年特認取扱い要領では「特認」用語が登場し、特認校とか特認校長といった表記も使用され、これを契機に90年代以降の新聞見出しから「無学年制」用語が姿を消し、ほとんど特認(校)用語が使用されている。しかし、昭和54(1979)年度実施以来、1980年代の新聞記事では「特認校」用語が見当たらず、この平成2年規定によって室蘭市で「特認校」用語使用が一般化したのであろうか。

1979年3月の実施決定時やその後の90年要領策定頃までの新聞報道では、「全市1区の通学制」「越境入学」「校区撤廃」「区域外入学」「無学区制」など多様な用語が使用されていたが、「無学年制」が一番多かったようである。

1981年8月末の室蘭民報は「実を結ぶ喜門岱小の無学区制 自然のなか伸び伸び教育 内気児童も活発に個人指導、先生に自信 入学希望者像に期待」の見出しで、「無学区制」導入3年目を迎えた成果を報道している。「広域入学児は転校生を含めて初年度(1979)1人、昨年度(1980)、そして本年度(1981)3人を加えて現在6人、全児童12人のちょうど半分を数えた、と紹介している。1982年1月22日の「虚弱児童もお

いで のびのび教育任せて 来年度の入学呼びかけ」見出し記事は、その冒頭で「室蘭市内ではただ1校無学区制を採っている喜門岱小学校の入学者はいまのところ1人、全児童が12人という超ミニ校だが、児童1人ひとりを大切にする教育の実践を基本としており、市教委や同校では“恵まれた自然環境のなかで伸び伸びと学ばせたいと思う子はぜひ当校へ”と多くの子どもの入学を呼びかけている」と述べ、「無学区制」用語が使用されている。

1979年3月13日の新聞報道でも言及されていたように、室蘭市も札幌市をモデルにしたようであるが、札幌との違いを強調するために「無学区制」用語を使用したのでしょうか？無学区制は学校自由選択制とほぼ同意であり、特認校の別名としては、曖昧な表現で適切とはいえなかったようにも感じるが、そのため特認校表現の使用に落ち着いたと理解しておきたい。

2. 小規模特認校・喜門岱小学校での37年の取り組みを考える

A. 喜門岱小学校の歴史的背景と地域

室蘭市は、良港立地条件に恵まれ、歴史的に、空知の炭鉱（石狩炭田）で採掘され、岩見沢から室蘭本線を通じて搬送された石炭を表日本の工業地帯に届ける輸送港として、また良質の原料炭を使った製鉄業の町として発展してきた港湾・工業都市で、田園地帯は乏しいが、喜門岱小学校が立地する北部の丘陵地帯は自然豊かで酪農業も営まれている。香川県からの入植者によって開拓された香川町を校区にしているが、室蘭市内で最も豊かな自然環境に恵まれ、最も規模の小さい小学校である。「平成21年度 喜門岱の教育」（喜門岱小学校：室蘭市教育研究所で閲覧）での学校紹介「地域と社会」と題した箇所では、以下のように記述されている。

「本校は、室蘭市の北部に位置する丘陵地帯にあり、牧草地と僅かな森林、農地に囲まれたへき地校である。この地域は明治の初期、香川県より移住した人々によって開かれたところであり、学校の歴史は古く本年度は開校113年目にあたる。

住民の職業は酪農を中心として農業であるが、市内に勤務するサラリーマンも多い。近年の過疎化現象に加え、農業を継ぐ者も少なくなり、通学児童をもつ家庭は今年度1軒のみになった。このような状況にあっても、向学の強い父母の血と汗で創設させ手塩にかけて育ててきた本校に対して、地域住民は強い愛着を抱いている。

昭和53年、室蘭市教育委員会は、健康に不安を持つ児童や恵まれた自然環境の中での教育を希望する児童に、本校を開放し、校区外からの通学を特別に許可した。以来、室蘭市全体が校区となり、地域外からの児童が在籍するようになった。

ところが、地域内の新入学児童が6年前より0人となったが、2年前に地域に転入してきた家庭の児童が1名、今年度入学したところである。平成12年度よりスクールバスも運行し、通学の便が良くなったこともあわせ、PR活動に力を入れ、本校への通学を希望する児童の確保に努めているところである」

なお、同じ個所の「父母の願い」の項目で記述されてある部分も、以下に紹介する。

「地域外から通学させている保護者は、自然豊かな環境で心豊かに伸び伸び育ってほしいという願いや、小規模校での1人1人に応じた行き届いた教育をしてほしいという願いを持っており、学校にかける期待も大きい。これらの思いは地域の保護者にも同じである。従って学校には協力的であり、参観日はもとより各種の行事や環境整備、花壇作り等にも夫婦で参加することが多い。また地域である町会の行事にも、地域外通学の児童の保護者も協力的で、地域とともに活動しようという風潮が見られる」

B. 児童数の推移

喜門岱小学校は1996年に百周年、2016年には120周年を迎える歴史の古い学校であるが、一貫して小規模複式校で、卒業生名簿を見ても、1910（明治43）年と1938（昭和13）年の11人が最多でそれ以外一桁で推移してきたようで、卒業生数5人未満の年度がかなり多いようである。

特認校スタートした1979年の全校児童数は3学級10人、校区外児童は1人で10%であったが、3年後の81年には50%に達し、その後は70%前後から80%前後の状態が続き、2006年以後は90%を超えたまま現在を迎えている。3学級複式もスタート時とほぼ変わらないが（時には4学級）、児童数はスタート時の2～3倍で、活気ある複式校といえようか。小規模・複式学級校をマイナスとしてではなく、特色として胸を張って受け止めている教職員の見識でもあろう。

既に紹介した90周年誌、百周年誌、110周年誌のいずれもが、特認校制度実施中に発行されているのにもかかわらず、校区外通学児童数の推移表を掲載していなかったが、そのことは公表へのためらいか、又は、校区外児童数の推移への関心が歴代教職員に乏しかったことの表れではなかろうか。特認校制度を実施している自治体や学校の多くが、制度導入以来の特認児童数の推移表を作成しており、多くの学校から提供いただいていたが、室蘭では入手に手間取り、筆者が作成しかけたものを補充・修正する方法で提供いただいた。特認児童数の推移表の引継ぎを受けられなかったのであろうから、学校には大変な苦労をお願いしたことになり、申し訳ない気持ちである。しかし、社会的に公表して導入された小規模特認校制度において、校区外児童数の推移は基本的な情報であり、その推移の公表は学校や教育委員会の社会的責任ではなかろうか。

校区の児童数が数人または0となり、圧倒的多数が校区外児童によって占められる状況をどう見るかは難しい問題であろうが、自然豊かな少人数校での学びを希望する、あるいは、それを必要とする児童や地元地域のために、喜門岱小が存在し続けていることの意義は重要と考えたい。

C. 児童数確保の苦労とPR活動

2005年3月、北海道新聞（2日地方版）は、西胆振の小規模特認校2校（伊達市関内小と室蘭市喜門岱小）の紹介を行っているが、「室蘭市内の小中学校で統廃合が進む中、喜門岱の存在意義をどうアピールするかが課題」「卒業や親の転勤で児童が減るたびに、冷や冷やします」などの喜門岱小の校長や教頭の談話を紹介しながら、同小では学校活動を紹介するホームページを頻繁に更新したり、幼稚園や保育所に学校案内を配布したりしているという。それらの効果もあって、2004年秋の体験入学を兼ねた「喜小っ子」まつりには150人が参加し、学校農園で栽培した農産物で作った料理を振る舞ったりして好評で、2004年には0人だった新1年生が05年4月には6人も入学するという。

なお、喜門岱小では02年からホームページを開設し、その充実に努めてきたという。北海道新聞（2010.11.14地方版）によれば、第8回全日本ホームページ（HP）大賞で、全国1万4千余校の中から、児童数32人の喜門岱小が経済産業大臣賞に選ばれ、それまでも何度も北海道代表に選ばれてきたという。

D. 通学手段の悩みとスクールバス運行

室蘭新報1984.4.18は、『「足」ない花の学校 『無学区制』スタート6日目 交通の便が悩み 希望者いるのに通えず』の見出しで、通学の足となるバスの便が悪く、希望しても通学困難で転入学をあきらめる児童も少なくないことを報じていた。このことは室蘭市議会でも議論され、2000年からスクールバスの運行が実現した。そのお陰で、20人前後の校区外児童を安定的に確保し、豊かな自然環境での少人数教育を求める市街地児童の願いに応えている。

E. 豊かな体験的学習

喜門岱小の体験的学習は多彩で、その多くが1年から6年までの全校学習であることが特徴的であろう。「花の学校」としての花壇づくりがメインであろうが、山菜採りやその調理の体験、ソバ打ちやうどん打ち、手作りカルタ大会、1日体験入学を兼ねた喜小っ子まつり、白鳥ハイツでの高齢者との交流、サケの稚魚放流、版画カレンダーづくり、スキー学習など、後掲の室蘭民報記事一覧も示すように、多様な体験学習が実施されている。もちろん、毎日の給食は全校給食であり、スキー学習は低学年も一緒に宿泊学習で、兄弟姉妹の少ない子どもたちにとって、異年齢交流は有益であろう。なお、1年間の学習活動をテーマにした版画カレンダー作成は喜門岱小の特色ある活動のようで、毎年12月末か1月上旬に、室蘭民報紙の1～2ページ（低学年と高学年の片方か両方）全面を使って、読者に大きく紹介されている。

F. その他、いくつかの新聞記事等より

- 2005年3月に喜門岱小校長を退職した前田一郎は、室蘭民報紙の退職インタビューで、4年間勤務した喜門岱小は「理想的なことが自然にできた学校だった」とその魅力を語り、願いは「喜門岱小の本当の魅力をもっと多くの人に知ってもらおうこと」、退職後は「仲間とともに応援する会を立ち上げ、地域の一員として支えていけたら」とも述べていた（室蘭民報2005.3.10）が、退職後に早速行動に移したようで、同年4月と5月には、「喜門岱小を応援しよう 有志、喜ら輝らクラブ編成へ」（4.14）、「喜門岱小の応援団誕生 学校行事バックアップ」（5.3）の記事が室蘭民報紙に掲載されていた。旧職員や元PTA会長等が発起人で、設立趣旨に賛同した22人が設立集會に参加したと報じているが、その後のことは把握できていない。
- へき地複式教育研究に関しては、1996年9月に第45回全道へき地複式教育研究大会会場校の1つとして研究授業を公開した記事が北海道新聞（96.9.27夕刊）に「へき地複式研究胆振大会 地域学習生き生き 喜門岱小では獅子舞発表」と題して紹介されている。また、2004年の室蘭民報（6.30）には「複式学級理解を深め 喜門岱小で教員研修会」見出しの記事があり、2010年（9.18）にも「へき地複式教育いかに!? 指導力磨く 喜門岱小とで公開研究会」と題した記事で第59回全道へき地複式教育研究大会会場校として複式授業と全校活動を紹介し、最近でも「豊かな心育む授業を 喜門岱小で研修会」（2014.7.5）記事等がある。
- 札幌市小規模特認校の盤溪小、有明小などは、夏休み等長期休暇中に自然体験学校として学校開放を行ってきたが、喜門岱小も特認校5年目の1984年から91年までの8年間、夏休暇中の自然体験学校として学校開放を行っていた。その盛衰について後掲資料②の記事題目が示すように、大規模な新施設誕生に伴い利用者が減少し中止された。

3. 室蘭市が位置する胆振管内における特認校実施の拡大

A. 白老町森野小中学校「オープンスクール（学区）」（1980～2002）

1995年に苫小牧市（樽前小学校）が、2003年に伊達市（関内小学校）が小規模特認校制度を導入したことは、入手できた2003年以後の北海道教育委員会資料にも掲載されてきたし、筆者も以前の拙稿で紹介したこともあるが、今回の報告を準備するきっかけとなった室蘭民報記事を調査している際に、室蘭市導入の翌年に白老町が「オープンスクール（学区）」名称で森野小中学校に町内全域からの通学を特例として認める制度を導入していたことを知った。校舎内の教室の壁を取り払った開放型校舎の「オープンスクール」とは異なり森野小中学校校区を町内全域に拡大する取り組みであり、特認校制度導入自治体としては、札幌市、室蘭市に次いで3番目となるが、残念ながら伊達市関内小学校に特認校制度が導入された2003年直前に閉校になっている。森野開基・森野小学校50周年、森野中学校開校30周年記念「郷土読本もりの」（1983.10.30）は

「こだま園ができた」「全町オープンスクール」の見出しで、次のように述べている。

「…そのころ、手や足の不自由な子どもたちのくんれんする所を造ってほしいというねがいが『白老町肢体不自由児父母の会』を中心に強くありました。それまでは、苦小牧のマザーズホームに通ってくんれんしていましたが、そこがいっぱいになり、どうしても白老に必要になったのです。53年12月、くんれん施設『こだま園』が森野の学校と廊下続きででき、手足の不自由な子が勉強とくんれんが一緒にできるようになったのです」(p. 34)

「子ども達が少なくなってきたので、55年4月から、それまでの校区を改め、森野の学校には白老町のどこからでも入学できることになりました。通学は、こだま園のバスを利用させてもらいました。オープンスクールとなった森野は、毎年毎年児童生徒数がふえ、すぐバスがいっぱいになってしまいました。そこで、森野に入学できる人数を1学年6人までと決め、バスも大型にすることになりました。こだま園ができたので、54年4月から手や足の不自由な子ども達も学校と一緒に勉強することになりました。手や足が不自由だからといって、ほかの子とちがうことをするわけではありません。遠足も歩けるところまでがんばって歩きます。運動会にも海水浴にも学校祭にも、そしてスキー大会にも参加します。健康な子は不自由な子をなかまとして大切にしますが、あまやかしたりはしません…」(p. 35)

この森野小中学校への「オープンスクール」導入を報じた室蘭民報紙(1980.1.18)では「オープンスクール」表現は見られないが、「自然の中でゆとり教育 白老森野小中校 通学区域の規制解除 全町に広げる 虚弱児童にも呼び掛け」の見出し7段記事で大きく伝えていたが、その冒頭部分を紹介する。

「自然環境の良い森野で学びませんか。白老町教委は新年度から、同町森野にある小中併置校の森野小中学校(野口正充校長・児童生徒21人)の通学対象区域を全町に広げ、町内のどこからでも子供たちが通えるようにする。同校の児童生徒数の減少に歯止めをかけるとともに、ぜん息などの虚弱児童に自然環境の良い所で勉強してもらおうというのがねらい。胆振管内では昨年、通学区規制を取り払った室蘭の小規模校、喜門岱小に続いて2番目。…」

そして、1980年度実施開始が目前に迫った3月26日の室蘭民報は、「通学区域を拡大 森野小中校 白老全町対象に」の見出しで、25日までに3人の校区外児童が同校への入学・転向手続きをしたこと、通学には、隣接する肢体不自由児通園訓練施設「こだま園」の通園バスを利用すること、などを報じていた。

札幌市では1977年に3小学校でスタートした小規模特認校制度が1985年に福移小中学校にも拡大されたが、白老町では、その福移小中学校より5年も早く小・中併置校の特認校が誕生していたのである。つまり、白老町森野小中学校の事例は、日本の特認校で小中併置校第1号、中学校特認校第1号ということになる。

なお、森野小中学校の閉校に関しては、「近年の入学児童の減少や併設しているこだま園の荻野小への移転、森野地区から通学する児童・生徒がなく、今後も同地区からの入学が見込めない」ためとの白老町小中学校適正配置協議会報告説明が室蘭民報紙(2001.6.13)に紹介されていた。

B. 苦小牧市樽前小(1995～)、伊達市関内小(2003～)、むかわ町宮戸小(2010～)

苦小牧市では、1994年4月に、樽前小学校過疎化対策協議会名で「樽前小学校の特認校化実現に関する陳情書」が市議会に提出されたのを受けて市議会や教育委員会で審議され、同年10月28日に認可、翌年の95年4月に実施された。陳情書には室蘭市喜門岱小学校や札幌市の駒岡小学校等を事前に訪問調査したことも述べられている。94年に4学級24名、新入生が95年は0人、96年と97年が各1人予定という状況の中で、学校の存続と活性化のために校区外からの児童の受け入れを願う地域関係者の熱意が新制度導入となったようであるが、3～4学級の複式校として最近でも30人台の児童数を確保している。

伊達市では、関内小学校PTAと関内地区連合自治会からの特認校認定要請を受けて、2002年11月22日の

教育委員会で関内小学校の特認校化を決定し、2003年4月から実施されたという。特認校導入の経緯について当時の関内小校長が室蘭民報紙でのインタビューで次のように語っている。

「…地元からの新入学児童が（平成）15、16年度に少ない状態となります。関内地区では中学校の統合問題があり、児童数が10人を切る状況ではさらにさらに小学校の統合も俎上に載りそうな気配をかんじていましたから、学校の継続を第一として、PTAや地域の方に理解と協力を求めました。10月になってからの申請でしたので半分あきらめていましたが、市教委の素早い対応により実現できました。

1人ひとりの児童に目が届く少人数教育が最大の特色…年齢の異なる集団による活動も日常的で、教職員を含め家族的な温かさがあります。本格的な農業体験のほか、6年前から取り組んでいる英語学習で、児童は言葉を学ぶ以上に国際理解を図っている。…」(室蘭民報2002.12.5)

2003年特認3人を含む全児童18人でスタートしたが、最近は30人以上の児童数を維持し、2016年度は42人となっている。

旧鷓川町では2004年に鷓川・二宮・春日・田浦・花岡の5小学校が閉校になり鷓川中央小学校が開校しているが、2006年には鷓川町と穂別町が合併し「むかわ町」が誕生した。そして、生田小・仁和小の閉校が決まり、町内の学校統廃合計画が一段落した旧鷓川町地区で、2010年度から唯一の小規模校になる宮戸小学校について、2009年度の町議会第4回定例会（11月9日）で教育長は、鷓川中央小学校への入学・通学予定の普通学級児童を対象に、希望により、宮戸小学校への入学・転学を認める小規模特認校制度を2010（平成22）年度から実施する旨、行政報告を行っている。制度導入7年目の2016年の児童数は19名で、そのうち4名が特認児童である。

おわりに～学校の資料保存と公開責任：地域図書館への寄贈の徹底を～

室蘭市立喜門岱小学校は2016年10月に創立120周年を迎える。1896（明治29）年10月に元室蘭尋常小学校喜門岱仮分教場として開校し、1917（大正6）年に喜門岱小学校として独立したが、創立以来今日まで、一貫して小規模な複式学級校として存在し続けている。関係者の苦勞と努力で支えられてきた120年の歴史と伝統に敬意と祝意を表するとともに、港湾・工業都市・室蘭市に残る貴重な農村型小規模校として豊かな教育力を発揮し、校区香川町住民や一部市街地児童の心のふるさととして、可能な限り存続することを祈念する。

さて、筆者は2016年7月13日に十数年ぶりで室蘭市に出かけ、市立図書館で室蘭市唯一の小規模特認校である喜門岱小学校に関する資料収集を試みたが、他の自治体、例えば旭川市教委発行の「旭川市の教育」各年度版には紹介されている「小規模特認校制度」実施状況に関する情報が、「室蘭市の教育」各年度版には全く記載されていなかった。喜門岱小学校百周年記念誌など、特認校制度導入後に発行された学校記念誌なども見出すことができず、「室蘭市の教育」各年度版に掲載されている学校一覧の中から、学級数や児童数の推移を把握できるだけであった（欠号も少なくない）。日常的に多忙な学校への訪問による資料収集は迷惑をかけるので、まずは図書館で可能な限り資料収集をしようと思っていたが、室蘭市立図書館での特認校資料の収集は困難と考え、学校記念誌の閲覧や特認児童数の推移資料などの提供のお願いの電話を図書館近くの駐車場から携帯電話で行った。多忙な状況下の学校の反応は予想以上に厳しく、特認校に研究関心のある札幌市民の門脇と名乗っただけでの資料閲覧願に対して、自宅の電話番号や住所、職業などを問われ個人情報情報を伝えたが、「学校へどうぞ」という返答はなかった。翌日14日、電話依頼の失礼を詫びつつ、小規模特認校に関する拙稿コピーも同封したお願いのお手紙を速達封書で発送し、1週間後にも追伸のお願い封書を送ったが、4週間反応がなく、再度お願いのお電話をかけ、「学校はあなたの研究に協力しなければならぬものではないでしょうか」と問われつつ、ようやく指定された8月16日午後初めて学校訪問を許され、幸い

110周年記念誌と私が事前に送付した学級数、児童数、特認児童数の表の補充、訂正表を受けとることができた。記念誌はこれしかない、ということで提供いただいた「110周年記念誌」編集後記に「十年前の百周年では…町内の歴史をもまとめた立派な記念誌も発刊いたしました」の記述を見出し、翌日に礼状を兼ねながら百周年記念誌があるなら是非拝見したい旨記し、礼状が配達されたであろう日の夕方お電話をしたら、今は多忙なので数週間後に連絡をとる返答で、ようやく4週間後の9月13日に、短時間であってもコピーのために外部に持ち出すことは認めないとの約束で校内での閲覧を許され、今日を最後にしてほしい旨、言い渡された。おそらく、いろいろな経緯で百周年記念誌が1冊しか残っておらず、それを紛失しないために無責任な外部研究者族には閲覧させないことにされていたのではないかと推測する。また、特認入学児童数の推移表にしても、そのような資料の受け継ぎがなく、求められれば倉庫の古い書類を探しながら作成しなければならない事情の中で、私からの資料提供の要請には応じたい事情があったのだろうと推測するし、古い資料の閲覧は大変な迷惑だったのではなからうか。学校でも教育委員会でも、古い資料の保存や引継ぎが充分には行われているとは言えず、特認校制度が導入されたときの資料を見せてほしいと依頼されても、探すとなると、忙しい日常業務の中で大変な負担とならう。

私の資料収集における個人的体験を綴ってしまったが、資料入手の困難さの弁解、学校批判やぐちこぼしのためだけに記したのではない。私個人を振り返れば、今まで多くの学校や教育委員会等を自分の都合で訪問し、貴重な資料・情報をいただきながら、時には礼状さえ怠ったり、提供資料を生かした論文も書かずに放置してしまったりしたことも少なくない。研究のためと依頼されて情報提供しても、その恩恵を受けることも少ない学校側からの研究者への厳しい批判として受け止める必要を感じたからである。日常的に多忙な学校現場に、研究協力をしたくなるような意義や魅力を感じさせない、研究者の一方的で自分勝手な協力要請にしか受け止めていただけなかった、私の説明不足に起因していたのではなからうか。今回の経験は、私自身の今までの身勝手な資料要求や研究者倫理の乏しさへの厳しい反省を迫るものとして貴重な体験となつたし、またそのお蔭で、今まで、あまり活用してこなかった研究資料の再発見の機会にもなった。

ところで、道内公立図書館でも、地域の学校の〇〇周年記念誌や閉校記念誌、学校要覧・実践研究報告書などを揃えて年代順に所蔵している図書館もあれば、そのような学校資料がほとんど所蔵されていない図書館もある。地域の公立図書館は、寄贈された文献・資料を受け身的に保存するだけでなく、積極的に収集し、郷土資料コーナーを充実する努力も必要ではなからうか。各学校も、記念誌、要覧、実践研究報告書などの公刊物を、継続して図書館に寄贈して保存してもらうことも必要ではなからうか。そうなれば、学校現場の教頭先生をはじめとする多忙な教職員に、外部研究者が迷惑をかけることも少なくなるのではなからうか。

札幌市に次いで2番目に古い歴史を有する室蘭市喜門岱小学校についての今回の研究は、北海道における特認校の歴史を全体的に把握するための一環として着手したものであり、それほど時間を費やす予定ではなかった。しかし、室蘭市の小規模特認校・喜門岱小学校に関する基礎的情報が室蘭市立図書館で得られず、市教委や学校からの情報提供に期待せざるを得なかったが、自分勝手な甘い期待を打ち崩される事態に遭遇し、ふと、地元新聞を調査してみる研究方法を思いつくことになった。マイクロフィルムや原紙による関連記事の探索は予想外の時間を必要とし、また意外な気づきにも遭遇した。そのために、今回、室蘭市喜門岱小学校に特化した本稿の執筆を試みることになった。室蘭民報紙の1990年以前や北海道新聞室蘭・西胆振版は室蘭市立図書館で、91年以降の室蘭民報は北海道立図書館や札幌市立図書館においてマイクロフィルムや原紙で閲覧させていただき、室蘭通い（私費）の回数を減らすこともできた。お世話になった関係図書館に感謝申し上げたい。いろいろな経緯があり、提供資料も限定されていたが、ご多忙の中、特認児童数の推移表を補充・修正下さり、110周年誌に加えて百周年誌と90周年誌の閲覧を許可いただいた喜門岱小学校にもお世話になり、ご迷惑をおかけした。お礼とお詫びを申し上げたい。室蘭市教育委員会学校教育課も度々訪

間し、ご多忙の中、資料提供や資料探しで大変お世話になり感謝する。白老町森野小中学校資料については白老町立図書館、むかわ町については同町の教育委員会や穂別図書館のお世話になった。

注及び参考資料

- ① 拙稿：小規模特認校制度の意義、実施状況、課題（北海道教育大学紀要 教育科学編 第55巻2号 2005.2）
- ② 拙稿：小規模特認学校の類型論的考察（北海道教育大学紀要 教育科学編 第56巻1号 2005.8）
- ③ 拙稿：小規模特認学校（「教育キーワード137」時事通信社. 第12版, 第13版. 2007.7, 2009.12）
- ④ 拙稿：福岡県における小規模特認校制度の導入と展開（「へき地教育研究」第71号. 北海道教育大学へき地教育研究部門. 2017.1）

拙稿以外は、新聞記事や学校記念誌が主であり、本文中にその都度明記した。

なお、参考資料として、末尾に、喜門岱小児童数等推移表と「室蘭民報」紙掲載の「喜門岱小学校」関係記事一覧（1978～2016）を紹介する（北海道新聞掲載の関係記事一覧はスペース不足で省略）。

資料①喜門岱小学校の学級数、全児童数（特認数）推移				10 (1998)	3	20	14 (70%)
年度	学級数	全児童数	特認児童数(%：門脇付記)	11 (1999)	3	11	8 (73%)
1978～2016 2016.8.16 喜門岱小提供				12 (2000)	3	20	14 (70%)
昭和 (西暦)				13 (2001)	3	20	14 (70%)
53 (1978)	3	10	2 (20%) 名簿等から推計	14 (2002)	3	18	12 (67%)
		9	0 (未実施) 室蘭民報	15 (2003)	3	18	12 (67%)
54 (1979)	3	10	2 (20%) 名簿等から推計	16 (2004)	3	21	16 (76%)
			1 (10%) 室蘭民報	17 (2005)	4	26	21 (81%)
55 (1980)	3	10	3 (30%) 名簿等から推計	18 (2006)	4	31	28 (90%)
			2 (20%) 室蘭民報	19 (2007)	4	37	34 (92%)
56 (1981)	3	12	7 (58%) 名簿等から推計	20 (2008)	4	38	36 (95%)
			6 (50%) 室蘭民報	21 (2009)	4	35	34 (97%)
57 (1982)	3	13	9 (69%) 名簿等から推計	22 (2010)	3	33	32 (97%)
58 (1983)	3	13	9 (69%) 名簿等から推計	23 (2011)	3	30	28 (93%)
59 (1984)	3	14	11 (79%) 名簿等から推計	24 (2012)	3	26	24 (92%)
60 (1985)	3	14	10 (71%) 名簿等から推計	25 (2013)	3	18	18 (100%)
61 (1986)	3	14	9 (64%) 名簿等から推計	26 (2014)	3	22	21 (95%)
62 (1987)	3	16	13 (81%)	27 (2015)	3	22	21 (95%)
63 (1988)	3	16	14 (88%)	28 (2016)	4	26	24 (92%)
平成元(89)	3	13	10 (77%)				
02 (1990)	3	10	8 (80%)	資料②【室蘭民報】紙掲載「喜門岱小学校」関係記事一覧 1978.1～2016.9 門脇正俊作成 ・ ちょっぴり寂しい巣立ちの季節 開校以来最少人数に 喜門岱小、 ことしは卒業生5人 在校生8人 新入生 1人 (1978.3.16) ・ たった1人の入学式 喜門岱小 (室蘭民報1978.4.7) ・ “花の学校” いま満開 喜門岱小 全道花壇コンクール 「今年こそ最優秀賞」 意気込む児童、先生 (室蘭民			
03 (1991)	3	11	9 (82%)				
04 (1992)	3	13	11 (85%)				
05 (1993)	3	15	10 (67%)				
06 (1994)	3	20	14 (70%)				
07 (1995)	3	21	17 (81%)				
08 (1996)	3	23	19 (83%)				
09 (1997)	3	22	16 (73%)				

- 報1978.9.8夕刊)
- ・喜門岱小の校区撤廃 来月から実施 市教委が初の試み 自然のなかのミニ小に「どうぞ」(室蘭民報1979.3.13)
 - ・待望の新1年生“越境入学”第1号 校区撤廃の喜門岱小 (79.3.31)
 - ・2年目のユニーク教育 「魅力…豊かな自然環境」区域外入学児ヤーイ 希望者目下ゼロ 喜門岱小(室蘭民報1980.1.125夕刊)
 - ・喜門岱小学校に校区外入学児 庸宏ちゃん, 速く来て “ユニーク教育生かせる” 先生ら大喜び(室蘭民報1980.3.13)
 - ・ボク・わたし1年生 室蘭 喜門岱小(室蘭民報1980.4.16)
 - ・実を結ぶ喜門岱小の無学区制 自然のなか伸び伸び教育 内気児童も活発に 個人指導, 先生に自信 入学希望者増に期待 (81.8.31)
 - ・虚弱児童もおいで のびのび教育任せて 来年度の入学呼びかけ 室蘭・喜門岱小(室蘭民報1982.1.22)
 - ・もやしっ子なくせ!! 喜門岱小 手作りフィールドアスレチック2年がかりで完成 地域ぐるみ 児童大喜び (82.5.11夕刊)
 - ・ここにも不況の影 減少続く新1年生 室蘭 喜門岱小には3人(室蘭民報1984.3.30)
 - ・「足」ない花の学校 「無学区制」スタート6年目 交通の便が悩み 希望者いるのに通えず 喜門岱小(室蘭民報1984.4.18)
 - ・喜門岱小キャンプ場に第一陣 花の学校に歓声高く 大自然に抱かれ親子が触れ合い(室蘭民報1985.7.30)
 - ・喜門岱小キャンプ場 市民にすっかり定着 大自然満喫が人気 開放2年目で500人利用(室蘭民報1985.8.28)
 - ・希望胸に学舎巣立つ 一斉に小学校卒業式 無学区制の第1号 喜門岱小の2人も 室蘭(室蘭民報1985.3.20夕刊)
 - ・花壇コンクール 喜門岱小に特別賞(室蘭民報1985.9.5)
 - ・喜門岱21年ぶり体育館増築(室蘭民報1986.8.7)
 - ・喜門岱小夏休み 開放ほぼ定着 昨年並み500人利用 自然環境の良さに人気(室蘭民報1986.8.14)
 - ・花のミニ小また快挙 全日本学校緑化コンクール 喜門岱入選 道内でただ1校(1988.2.21)
 - ・喜門岱にも新入生 ミニ小ならではの熱烈歓迎 (1988.4.7)
 - ・1人だって頑張るよ 室蘭・喜門岱小 徹君 元気に入学 (89.4.7)
 - ・晴れた!!運動会だ!!喜門岱小 手に汗 自転車レース (1989.5.29)
 - ・利用者減少の喜門岱小開放 今夏はわずか2団体 だんバラへ流れ先細り(室蘭民報1990.8.3夕刊)
 - ・児童数の減少進む室蘭 喜門岱小は新入学児ゼロ 学級数減らす学校も2ヶタ割れば統廃合か(室蘭民報1990.4.5)
 - ・喜門岱小開放打ち切りへ 室蘭市教委の夏季宿泊研修事業 新施設へバトンタッチ(室蘭民報1991.9.2)
 - ・自然教育を肌で 喜門岱小 児童ら1日体験入学 (1993.2.8)
 - ・たった2人の卒業式 室蘭市喜門岱小 でも感動いっぱい 一輪車の思い出深く(1993.3.23)
 - ・喜門岱小の全児童数15人に 新1年生ら5人入学 児童数増加で念願の養護教員配置(室蘭民報1993.4.12)
 - ・運動会は6日です 室蘭・喜門岱小 心込め手づくり案内状(室蘭民報1993.5.31)
 - ・花の交流“咲く” 白鳥ハイッで花壇造り 喜門岱小 (1993.7.22)
 - ・丹精込めて“満開” 喜門岱小など最優秀賞 室蘭・花壇コンクール審査会(室蘭民報1993.9.21)
 - ・巣箱作りに挑戦 喜門岱小で1日体験入学(室蘭民報1993.10.4)
 - ・豊かな心輝く受賞 羽ばたく白鳥表現 優良賞・喜門岱小 北海道花いっぱいコンクール(1993.10.27)
 - ・自然と遊び自然に学ぶ 喜門岱小の四季1995カレンダー (94.12.31)
 - ・きれいに咲いたね 室蘭花壇コンクール 模範花壇賞 喜門岱小と柏木町(室蘭民報1995.9.9)
 - ・粘りがあっておいしい 室蘭・喜門岱小 ソバづくりを体験学習(室蘭民報1995.10.9)
 - ・喜び満開「優秀賞」全道花いっぱいコンクール 柏木公園 喜門岱小(室蘭民報1995.10.10)
 - ・自然教育の成果披露 室蘭・喜門岱小でプレ研 へき地複式教育研究大会(室蘭民報1995.10.21)
 - ・「花の学校」来季100周年 記念協賛会が発足 事業立

- 案スタート 喜門岱小 (室蘭民報1995.11.1)
- ・喜門岱小の灯を守れ!! 市街化区域編入運動へ 室蘭・香川町 地域衰退の危機 立ち上がる住民 (95.11.11)
 - ・喜門岱小の灯消すな 存続かけ増築運動へ 同窓会の森田会長 隣接地寄贈も申し出 父母, 地域一丸 室蘭市に陳情 (1996.4.24)
 - ・1年生待ち遠しいな 喜門岱小皮切りに1日体験入学始まる (1997.2.5)
 - ・「御供獅子舞」奉納へ練習に熱 喜門岱小児童ら勇壮に (97.9.4)
 - ・喜門岱小最高の模範賞に 室蘭で花壇コンクール (97.9.7)
 - ・喜門岱小で楽しく歓迎の会和やかに行われた1日体験入学 (97.9.22)
 - ・喜門岱小の四季 1998カレンダー 1～3, 4～6年 (98.1.7～8)
 - ・喜門岱小カルタ大会 児童の手作り, 歓声 クイズ解き「ハイッ」(1998.2.20)
 - ・新1年生や～い 喜門岱小, 6年ぶりゼロのピンチ (98.3.5)
 - ・喜門岱小新校舎の実施設計 自然とマッチした木目調 (98.6.11)
 - ・新校舎工事, 急ピッチ 2倍の広さ, 保健室など新設 (98.8.15夕刊)
 - ・郷土芸能保存会と喜門岱小児童 踊りに野性味 豪快な曲打ち (98.9.11)
 - ・花の学校喜門岱 心豊かな自然授業 参加しませんか 27日の体験入学 (98.9.25夕刊)
 - ・「喜門岱小は楽しいよ」 1日体験入学に親子4組が参加 (98.9.28)
 - ・喜門岱小の四季 1999カレンダー 1～3, 4～6年 (99.1.4～5)
 - ・喜門岱小新校舎ほぼ完成 28日, 市民にお披露目 (99.2.22)
 - ・新校舎へ引っ越し 喜門岱小 今日入校式 (99.2.27)
 - ・新校舎から6人巣立ち 喜門岱小で卒業式 (99.3.21)
 - ・ぬくもり伝わる案内板 室蘭の耕電設 喜門岱小に寄贈 (99.5.13)
 - ・わが喜門岱小「もっと知って」PTA「父の会」願い込め案内標識を制作 (99.8.6)
 - ・きれいな校舎に好印象 喜門岱小で1日体験入学 (99.9.13)
 - ・喜門岱小 新校舎落成祝う 喜び胸に記念式典 (99.10.4)
 - ・スクールバス運行へ 室蘭・喜門岱小 新年度から校区外通学児対象に (室蘭民報2000.2.26)
 - ・スクールバス運行 室蘭・喜門岱小 (室蘭民報2000.4.7)
 - ・春の味「おいしい!!」喜門岱小児童が山菜採って料理 (2000.5.15)
 - ・17日に1日体験入学 「喜小っ子まつり」で歓迎 室蘭・喜門岱小 (室蘭民報2000.9.14)
 - ・室蘭の花壇コンクール 喜門岱小など最優秀賞 (01.9.6)
 - ・伝え合おう 喜小っ子の2002年 喜門岱小4～6児童作成 (02.1.5)
 - ・保存会と喜門岱小児童ら 室蘭の郷土芸能「御供え獅子舞」成功願ひ練習に熱 全道イベントで披露へ (2002.2.11)
 - ・読書の楽しさ紹介 喜門岱小 山下さんが講演会 (2002.2.20)
 - ・3人だけの卒業生巣立つ 室蘭・喜門岱小感動の式典 (2002.3.25)
 - ・今年もカラフル花壇を 花の学校願ひ児童が植え (2002.4.25)
 - ・花壇コンクール審査「頭痛いね」 最優秀に喜門岱小 (2002.9.4)
 - ・特認校の室蘭・喜門岱小 21日に1日体験入学 (2002.9.17)
 - ・自然教育を体験 特認校の楽しさ実感 喜門岱小 (2002.9.24)
 - ・「ありがたいね」白鳥ハイッでふれ合い 喜門岱小 (2002.12.17)
 - ・喜門岱を忘れないで 笑顔でミニスポーツ 卒業生と在校生が対戦 6年生を送る会 (室蘭民報2003.3.15)
 - ・「学校楽しいよ」上級生一輪車パフォーマンス披露 (03.5.10)
 - ・発明の歴史学ぶ 特許出前授業楽しく 室蘭・喜門岱小 (03.7.4)
 - ・4年連続で4部門制す 室蘭花壇コンクール 喜門岱小 (03.9.7)

- ・ 伝統つなぐ御供獅子舞 喜門岱小児童ら練習に汗 (03.9.9) (06.4.22)
- ・ 喜小っ子まつり“魅力”アピール 喜門岱小で学校説明会 (03.9.22) ・ 喜門岱小児童ら山菜採り 春の恵み「あったよ」(06.5.17)
- ・ 来年もきれいに咲いて 自慢の花壇から種採取 (03.10.22) ・ 取り札ヘダッシュ 喜門岱小で手作りカルタ大会 (06.5.20)
- ・ 元気よく一輪車披露 児童の頑張りに拍手 喜門岱小 (03.11.17) ・ 夜の校舎を舞台にふれあいキャンプ 喜門岱小児童大はしゃぎ おしゃべりや探検楽しむ (07.7.19)
- ・ 衛星通信で「こんにちは」香川の小学校と交流 喜門岱 (03.11.22) ・ 安心して遊んで 2事業所アスレチック補修 室蘭・喜門岱小 (07.7.26)
- ・ 室蘭・喜門岱小 うどん打ちに大喜び (2004.1.22) ・ 合唱と器楽 元気よく 喜門岱小児童 お年寄りと交流 (07.12.8夕刊)
- ・ ばっちりスキー上達 宿泊研修 1年生も親元離れ (2004.2.5) ・ 喜門岱小で百人一首や雪合戦交流 宮古島・狩俣小の児童ら (室蘭民報2008.1.21)
- ・ テレビ会議による香川との授業公開 喜門岱小で実技研修講座 (2004.2.11) ・ 笑顔も咲いた 室蘭・喜門岱小チューリップ (08.5.9)
- ・ 「きれいに咲いて」児童ら花の種まき 室蘭・喜門岱小 (04.4.24) ・ カルタ見つけダッシュ 室蘭・喜門岱小児童会が手作り (08.5.17)
- ・ 春の恵みあったよ 児童ら山菜採り 室蘭・喜門岱小 (04.5.11) ・ 全国HP代表校に輝いた室蘭・喜門岱小 特認校の特色押し出す「普段着」の姿見て (室蘭民報2008.8.28)
- ・ 複式学級授業理解深め 喜門岱小で教員研修会(04.6.30) ・ うどん打ちにチャレンジ 子供たち「楽しい」 室蘭・喜門岱小 (室蘭民報2008.10.20)
- ・ 喜小っ子の1年 生き生きと 喜門岱小版画カレンダー (05.1.11) ・ サケの稚魚 そろり放流 室蘭・喜門岱小 (室蘭民報09.4.28)
- ・ 「上手に滑れたよ」喜門岱小が宿泊学習 だんパラスキー場 (05.1.28夕刊) ・ 思い思い花のアレンジ 喜門岱小児童10人 完成品に満足顔 (2009.8.25)
- ・ ディム先生ありがとう 喜門岱小全校児童英語学習の成果発表 (05.3.3) ・ 子供の絵ずらり 登別で展示会 喜門岱小・佐藤君の作品全国審査会出品へ (2009.9.1)
- ・ 喜門岱「複式」編成を解消 1年生増え学級数拡大 (05.4.5) ・ 先生たちが研究発表 室蘭・喜門岱小に80人 話し合い授業公開も 全道へき地複式研大会胆振プレ大会 (09.10.10)
- ・ 喜門岱小応援しよう 有志 喜ら輝らクラブ結成へ (05.4.14) ・ 喜門岱小楽しい1年間 版画カレンダー作品紹介 (2010.1.14)
- ・ 喜門岱小の応援団誕生 学校行事バックアップ (05.5.3) ・ 喜門岱小児童が室蘭岳登山「喜門岱岩」あった「学校名と同じ」歓声 (2010.6.19)
- ・ チューリップやっとな満開 室蘭・喜門岱小 (05.5.27) ・ 喜門岱小HP道代表に 全国10位以内めざす(2010.7.17)
- ・ 「手打ちはおいしい」児童がうどん作り 室蘭・喜門岱小 (05.10.20) ・ 自然体験で沖縄へ 喜門岱小の6年生6人 (2010.7.22)
- ・ 喜門岱小ニジマス釣り 大物次々歓声“上がる”(05.11.1) ・ 卒業アルバム今年も手作り 喜門岱小PTAメンバー「喜ぶ顔が見たい」(2010.8.23)
- ・ お年寄りいい顔 喜門岱小児童白鳥ハイツ訪れ交流 (05.12.11) ・ 野の花でオブジェ 喜門岱小児童と楽しむ 室蘭年金受給者協会 (2010.8.24)
- ・ 編入学の児童が増加 室蘭の特認校・喜門岱小 特色ある教育魅力 選択肢の一つとして浮上 (06.1.23) ・ へき地複式教育いかに!? 胆振の教員、指導力磨く 喜門岱小で公開研究会 (2010.9.18)
- ・ 元気に帰ってきてね 喜門岱小児童、サケの稚魚放流

- ・自然の中特色ある教育 学年超え交流, 住民らが授業
…室蘭唯一の特認校・喜門岱小 入学申請12月開始へ
(2010.10.10)
- ・笑顔も“大漁” 喜門岱小児童がニジマス釣り
(2010.10.19)
- ・喜門岱小に校名看板 室蘭堅林さんら3人寄贈
(2010.10.20)
- ・1年の思い出刻む 版画カレンダーが完成 喜門岱小
(10.12.26)
- ・卒業生6人に贈る 思い出いっぱい手作りアルバム
室蘭・喜門岱小PTA (室蘭民報2011.3.20)
- ・喜門岱小児童 山菜採り満喫 ヨモギ, フキ「あった！
あった！」(室蘭民報2011.5.10夕刊)
- ・室蘭・喜門岱小新1年生 自然体験 豊かな心に(室
蘭民報2011.5.15いま学校で①p. 8ほぼ全面)
- ・早く大きくなってね 室蘭・喜門岱小で野菜作り
(2011.5.25)
- ・2学期も笑顔いっぱい 喜門岱小「収穫祭」(室蘭民報
2011.8.27)
- ・伸び伸び授業風景 喜門岱小一般公開参観 市民ら40
人見学(室蘭民報2011.9.6)
- ・喜門岱小タイムカプセルを開封 13年後…約束の日に
再会 (11.10.2)
- ・室蘭・喜門岱小HP 4年連続の道最優秀賞 全国進出
職員ら「大変名誉」(2011.10.21)
- ・学習や行事 カレンダーに 喜門岱小が版画で制作
(2011.12.24)
- ・楽しい思い出をつくろう 室蘭・喜門岱小学校 2012
年カレンダー (室蘭民報2012.1.25)
- ・「全校遊び」でみんな仲良く 室蘭唯一の特認校 喜門
岱小学校 (室蘭民報2012.2.1)
- ・喜門岱小児童 宮古島で交流 室蘭エメラルドの会写
真展 (室蘭民報2012.2.15)
- ・いじめ, 差別なくそう 思いやりの心を学ぶ 室蘭喜
門岱小で人権教室 (室蘭民報2012.9.19)
- ・自然生かした学習披露 室蘭・喜門岱小参観日 (室蘭
民報2012.10.22)
- ・版画カレンダー 今年もお目見え 喜門岱小児童の作
品 (室蘭民報2012.12.26)
- ・室蘭・喜門岱小, 感動の卒業式, 夢や希望を抱き続けて,
「百年の木」高らかに (室蘭民報2013.3.18夕刊)
- ・喜門岱小で山菜調理学習, 春の恵み「おいしい」
(2013.5.18)
- ・大きなニジマスが釣れて喜ぶ児童 室蘭・喜門岱小
(13.10.3夕刊)
- ・リース, ネームプレート…ツルや落ち葉使い手作り
(13.11.6)
- ・楽しい学校生活版画に 来年用カレンダー製作
(13.12.11)
- ・室蘭・喜門岱小, 2014年版画カレンダー, 笑顔はじけ
る学校生活 (室蘭民報2014.1.14)
- ・室蘭・喜門岱小で1年生を迎える会 (室蘭民報
2014.4.22)
- ・ササノコ見つけた 喜門岱小児童が山菜採り(2014.5.13)
- ・豊かな心育む授業を 喜門岱小で研修会 胆振へき
地・複式学校教員 (2014.7.5夕刊)
- ・複式学級に関心 喜門岱小公開参観日 (2014.11.17)
- ・冬のスポーツ元気に, スキー, 喜門岱小 (室蘭民報
2015.2.15)
- ・室蘭・喜門岱小, 自動車安全教室, 横断歩道降りて確
認左右 (室蘭民報2015.4.15)
- ・自然体験, 山菜採り 春味わう, 調理実習 喜門岱小
(2015.5.31)
- ・何気ない日常, 版画に 喜門岱小 カレンダーづくり
(2015.12.22)
- ・一輪車「上手だね～」室蘭・喜門岱小全児童発表会
(2016.2.23)
- ・室蘭・喜門岱小3年高津さん, 熱い訴え全国奨励賞,
青少年読書感想文コンクール (室蘭民報2016.3.14)
- ・室蘭・喜門岱小, 7年ぶり単式学級, 1年生6人入学
(2016.3.25)
- ・室蘭・喜門岱小, 交通ルール学ぶ, 左右しっかり確認
(2016.4.20)
- ・室蘭・喜門岱小, 山菜採り, 春の恵みに感謝 (室蘭民
報2016.5.22)
- ・喜門岱小, 出前ピアノコンサート, プロの音色に児童
感激, 室蘭出身・川瀬さん音楽の魅力伝える (2016.5.26)
- ・室蘭・喜門岱小「交通エコロジー教室」, 温暖化防止の
取り組み学ぶ (室蘭民報2016.7.25)

(岩見沢校 特任教授)